

平成二十四年六月十日発行
皇學館論叢第四十五卷第三号
抜刷

書
評

『伊勢市史 第二卷 中世編』

伊
藤
裕
偉

『伊勢市史 第二卷 中世編』

伊藤 裕 偉

皇學館論叢 第四十五卷第三号
平成二十四年六月十日

はじめに

「伊勢」の自治体史編纂と新『伊勢市史』

『伊勢市史』第二卷中世編（以下、「本書」あるいは新『伊勢市史』とする）が刊行された。この市史編纂事業は、一自治体史の編纂という枠に止まらない大きな意味を持つ。言うまでもなく、伊勢市には中世の一大権門である神宮（皇大神宮Ⅱ内宮、豊受大神宮Ⅱ外宮）がある。神宮に関する史料は、京都・奈良近郊に所在する寺社と比較しても質量ともに豊かであり、これを正面から扱うのは並大抵のことではない。それを、平成一七年からのわずか六年間で精緻な検証・整理がなされた。そして、本文六八七ページ、付属CD一枚に及ぶ大部の刊行物とし

て世に出された。神宮周辺地域Ⅱ伊勢市の、しかも中世のみを扱った著作物としては前例の無い、重厚な内容である。

伊勢市域を対象とした自治体史編纂は、今回の事業も含め三回あった。一回目は昭和四（一九二九）年に刊行された『宇治山田市史』で、上下二巻にわたり、本文二六九〇ページに付録・索引が付いたものである。『宇治山田市史』は宇治（内宮）と山田（外宮）に関する詳細な記述で知られ、現在もなお当地の辞書的な機能を十分に發揮している秀作である。

二回目は昭和四三（一九六八）年に刊行された『伊勢市史』である（以下、今回の『伊勢市史』との混乱を避けるため、旧『伊勢市史』とする）。旧『伊勢市史』は、『宇治山田市史』編纂後の続編として、明治三九年の市制施行以後の歴史に特化したものとなっている。そのため、中世に関する記載は一部を除

さほとんどなされていない。

そして三回目の編纂事業として、本書が刊行された。本書の編纂事業が、『宇治山田市史』編纂以来の資料整備・増加と相俟って、大いなる展望のもとで実施されたことは、この経緯を見ても推察される。全八巻のうちの一卷が「中世編」として充てられていることも、『宇治山田市史』編纂以来の意気込みが推し量られよう。

本書の編集は、伊勢市史編集専門委員会の岡野友彦氏（皇學館大学教授）、執筆陣は岡野氏のほか、石井昭郎・多田實道・恵良宏・窪寺恭秀・千枝大志の各氏で、多くが皇學館大学関係者によって布陣されている。地元伊勢市に密着した、伊勢市ならではの執筆陣といえるだろう。

一 本書の内容

本書は、一二世紀後半から一六世紀後半にかけての時期を扱っている。全体は「第一章 鎌倉時代の伊勢」、「第二章 南北朝時代の伊勢」、「第三章 室町時代の伊勢」、「第四章 戦国時代の伊勢」で構成され、それぞれの章で節・項分けがされている。では、評者の意見も入れながら、本書の構成と内容を紹介しよう。

（一）第一章 鎌倉時代の伊勢

この章は二三四ページ分が充てられている。本書全体の約三分の一にあたる。

「第一節 源平の争乱と伊勢」（恵良氏執筆）では、伊勢平氏の概説と神宮との関連、源平合戦における伊勢市域近隣の状況、鎌倉期における神宮神官と幕府、とくに源頼朝との関係が解説されている。

「第二節 鎌倉時代の遷宮と神宮祠官」（多田氏執筆）は、当該期の神宮に関する祭祀の執行状況を中心に記述されている。神宮の遷宮（式年・仮殿）に関する様々な祭事やその財源に関する解説が丁寧で、神宮祭祀に関する辞書としても有効である。後段では内宮・外宮の神官（祠官）に発生した相論についても言及する。神官の立場で重要な問題とされていたことの位相が知れて面白い。

「第三節 神宮領と武士」（多田氏執筆）では、古代から中世にかけて土地制度史のなかで神宮領を位置づける。領主としての神宮組織が地域社会のなかでどのような役割を果たしたのか、そして神宮領の種類や性質、その内訳についても詳細な記述がなされる。そして、その展開を観察するなかで武士の関与に言及し、この地が地頭領主制が展開しなかった地域として位置づける。また、度会郡内における御園・御厨の比定が表や図

によって示されているのは、読む側としては分かり易く便利である。ただ、度会郡内の御園・御厨比定地のなかで、岩坂御園を度会郡度会町棚橋付近としているが、当御園は現在の度会郡玉城町勝田の南部、勝田大池南部の楠ノ木遺跡付近に比定するのが妥当と考える¹⁾。

「第四節 鎌倉時代の神宮と仏教」(多田氏執筆)では、東大寺大仏殿再建にかかる俊乗坊重源と神宮との関与を皮切りに、内外宮に設けられた法楽舎および太神宮法楽寺(度会町棚橋)の意義、仏教者の参宮、小朝熊社の神鏡事件について触れる。重源の参宮は、その後の僧尼参宮増加への大きなきっかけになったと評価し、その行動は仏教徒による神宮法楽の盛行へとつながるとした。これに関しては、最近その意味が再評価された律宗系寺院弘正寺と神宮との関係にも考察が及んでいる。また、この節では異質な存在ながら、小朝熊社の神鏡事件に関する分析は、神異に関わって村人、朝廷・守護・地頭、神官のほか、鈴鹿関守、参詣道者など様々な人々が関わっていることが見えて興味深い。

(二) 「第二章 南北朝時代の伊勢」

この章は一〇八ページ分が充てられている。本書全体の約六分の一弱である。章全体を岡野氏が執筆している。

「第一節 北畠親房と恵観」では、南北朝分裂期の南朝方と伊勢および神宮との関係について触れている。とくに伊勢神宮と朝廷との関係を、大覚寺党と持明院党の神宮に対する温度差の観点から見る。このなかで、この時期に衰退・廃絶へと向かう齋王制度をのり方を切り口として解きほぐしている。こういうった観点はこれまでに無い斬新なものであるだけでなく、地域史を日本史全体のなかで位置づけるうえでも、さらには地域史の中の観点を提示するうえでも大いに注目できる。また、北畠親房の伊勢下向を、後醍醐天皇による伊勢遷幸計画の一端として位置づけている。このように、新しい伊勢の南北朝時代像を開拓するうえで大変魅力的な指摘が多いのが本節の特徴である。

ただ、このなかでひとつ気になるのが、康永二年三月二日付、仁木義長軍勢催促状(津田文書)中に見える「五ヶ城」を、「志摩国五箇城」と解釈し、仁木義長が「志摩国五箇城」を攻撃した、と解釈した点である。志摩国には「五箇」の地名は無いが、「五ヶ所」(現在の南伊勢町五ヶ所)がそれに該当するとして古くは解釈されていた。しかし、中世古祥道氏の検証の後²⁾は、「五箇」は榊田川中流域にある地名で、「五ヶ城」は多気郡多気町古江にある五箇篠山城跡とする見方が定着したと考えられる³⁾。市史という性格上、個々の解釈に関する細かな検証は示

しにくいだろうが、これを「志摩国五箇城」と解釈するのであれば、現在の研究動向を踏まえた批判を改めて期待したい。

〔第二節 南北朝時代の遷宮と御杣山〕では、神宮遷宮にかかる用材を調達する御杣山の変遷を追う。御杣山の変遷は木村政生氏の業績に代表されるように、神宮を基準とした精緻な検証が積み重ねられてきているが、本節では南北朝期という時代のなかでの位置づけを基盤に据えている。神宮の御杣山も、時代の趨勢と無縁ではなかったことを明らかにされた。また、神宮祭主を独占してきた大中臣氏一族も南朝・北朝との諸関係に巻き込まれており、そのなかで北朝と神宮との視点も提示する。南朝との関係が強調されがちな伊勢と神宮のなかに、新たな視座を提示したものであり、神宮史を日本史の一端として位置づけることに成功している。

〔第三節 伊勢国司北畠氏〕では、長い研究史のある北畠氏について、北畠満雅の乱までの動向を記す。伊勢国司初代は誰か、という問題を再検証するとともに、領域支配者としての伊勢国司という立場と、武家政権内の役職である伊勢守護との異質性について、近年の研究動向から整理する。総論的には興味深い内容であるが、『伊勢市史』という書物の目的と伊勢国司の初代探究という内容には齟齬を感じる。

（三）第三章 室町時代の伊勢

この章は一二八ページ分が充てられている。本書全体の約六分の一強である。

〔第一節 室町殿の伊勢参宮〕（岡野氏執筆）は、足利義満から義教にかけて実施された將軍家の伊勢参宮を、「將軍」として実施したのではなく、足利家の家長である「室町殿」として举行されたものと位置づける。そして、各期に見られる参宮日記類を分析するなかで、それぞれの時期の特性を見出している。この節では、重要な日記史料そのものをいくつか活字で示しており、実際の史料にどう記載されているのかを知れるのが嬉しい。

〔第二節 大塩屋御菌と製塩〕（岡野氏執筆）は、「太田家古文書」を素材に大塩屋御菌の製塩を分析する。大塩屋の場所を、宮川河口部に展開していた広い範囲と把握し、太平洋海運の盛行も、当地の先進的な製塩業を背景にしたものと評価する。伊勢と東国の太平洋海運を示す史料として重視されている「湊船帳」（「武蔵国品川湊船帳」、称名寺蔵、金沢文庫保管）も、製塩業の発展と販売圏拡大を示す史料とする点は面白い。神宮が関与した「神船」は、とかく年貢の搬送という視点からのみ検討されてきたが、ここではそこに商業的な側面を見出すことで、神船に対する神宮の相対化がなされたと評価する。

「第三節 地下人層の成長」は、項単位で執筆されている。

「一 山田三方の登場」(千枝氏執筆)は、山田を「集合体的宗教都市」とし、そこに地域的紐帯を有した集団としての山田三方が成立したことや、市場との関係を記す。この項は、後出する第四章第四節の前史として位置付けられている。「二 神人と地下人の争い」(石井氏執筆)は、神宮組織の下部を構成する刀祢・神人・神役人を分析し、神人の衰退と山田三方の盛行を関連付ける。「三 戦国への序章」(窪寺氏執筆)は、神宮組織である道後政所の衰退と北畠氏支配の進展を記し、一方で神宮の遷宮行事であるお木曳き・お白石持ち行事の動向と遷宮の途絶を見ている。

(四) 第四章 戦国時代の伊勢

この章は二二七ページ分が充てられている。本書全体の約三分の一である。ただし、巻末に付属するCDデータはほぼこの章(とくに第四節)に関するものなので、実質はさらに多くのページが充てられていることになる。

「第一節 宇治山田合戦」(石井氏執筆)は、一五世紀後半から一六世紀後半にかけて宇治および山田の地で展開した戦乱と確執を経年的に記す。そのなかで、地下人層や神官層、あるいは北畠氏をはじめとした領主権力層の関与していったのかを描

いている。伊勢市域を中心とした戦乱を細かに描写しており、地域のなかでより親しまれる内容となっている。欲を言えば、この戦乱が神宮エリア外にいかなる影響を持ったのかに関する言及がほしいところである。

「第二節 戦国期の神宮と祈禱」(窪寺氏執筆)は、明応の震災や河川反乱・火災など一五世紀から一六世紀代にかけての災害を総覧し、そのなかで神宮の神事・祈禱にも変化が生じていることを見出す。東日本大震災を経験した時節でもあり、災害の歴史を知らしめるうえでも本節は有効である。

「第三節 慶光院と遷宮の復興」(石井氏執筆)は、戦国・織豊期の遷宮途絶から慶光院の登場によって遷宮が再開されるまでの動向を解説する。織田・豊臣氏の動向にも絡めて慶光院と式年遷宮との関係が扱われている。慶光院の動向は、これまでも個別に扱った研究は多いが、系列的に扱ったものは少ない。ここでは、史料そのものの掲載も含め、これまでの伝承と史実とを明確に分離して検証しており、貴重である。ただ、尾鷲市にある石造不動明王立像と石造毘沙門天立像については、両像が清順上人にかかる供養塔とする点に異論は無いが、熊野街道八鬼山道沿いに造立された町石とは別個に扱うべきもの⁽⁵⁾と考える。

「第四節 宇治山田の発展」(千枝氏執筆)は、第三章第三節

一と連続する章である。山田三方と商業座との関係を皮切りに、山田・宇治のほか、勢田川流域在所の自治的組織構成員とその実態を検証する。また、山田地内に存在する産土社と神宮組織や地域住民との関与を検証するなかで、地域構成の動きは中世後期から近世前期まで連続するものであることを指摘する。さらに、市場・座や山田・大湊に特徴的な貨幣の動向、そして伊勢御師の人的関係にも触れる。この節は、宇治・山田の住民を詳細に分析し、住民の公的・私的性格や活動を明らかにしており特筆できるが、固有名詞が多数登場することや解説が錯綜していることなど、全体としてかなり難解であり、内容を理解するためには数回の精読を要する。

〔第五節 伊勢御師の成長〕（窪寺氏執筆）では、戦国・織豊期における伊勢御師の動向を、実際の文書を提示しながら解説する。また、近世に江戸幕府が定置する山田奉行の前身として、織田・豊臣氏の御師として活動していた上部貞永らを位置づけている。

以上、本書の内容をごく簡単に紹介した。極めて充実した内容のため、この程度の解説では執筆者の趣旨を言い尽くせていないとも思える。逆に言えば、それほど大きな業績が本書であるといえるのである。

二 本書の成果と課題

（一）成果

本書最大の成果は、伊勢市域に関するこれまでに無い新しい視点、つまり地域や住民視点での歴史像を提示したことにあつた。これまで当該地域の歴史とは、すなわち「神宮の歴史」であつた。歴史的にも現状としても、それほど神宮は巨大な存在であり、今後もその側面が揺らぐことは考えにくい。しかし、権力・権威的に見れば「神宮の歴史」であつても、その根幹にあるのは、神宮を支え続けてきた地域住民に他ならない。本書は、このことを基軸に据えた書である。

とくに、神人や地下人のほか、地域産業に対する視角が広がり、活き活きとした中世人の描写がなされている。南北朝期における光明寺僧恵観の活動（第二章）、宮川河口部の製塩業に関する解説とその歴史的位置付け（第三章）、山田住人の人的・地域的諸関係の解明（第四章）などは、歴史学という学問の領域では相応の認知がなされているものの、自治体史のなかに組み込むことで地域の人々に豊かな中世史像を提示したことは大きく評価できることである。これらの仕事により、神宮周辺地域で展開した様々な歴史を俯瞰的・複合的に見る視野を提示す

ることにつながっている。

また、神宮仮殿遷宮（第一章第二節）や織豊期大名権力との関係（第四章）など、これまでによく知られていながらあまり検討されていなかった課題についても、本書では丁寧な検証がなされている。これも、本書が持つ意義ある特色の一つである。

これらによって、神宮および神宮史を一定程度相対化することになったのが本書といえよう。歴史素材を相対的な存在として置くことは、どのような対象であっても必要だが、なぜか神宮に関してはその視座がこれまで欠乏した感が強い。冒頭に記したとおり、中世における神宮とその周辺にかかる動向は、一地域史のレベルに止まるものではなく、列島規模の歴史における基層部分に深く入り込むものである。であるからこそ、本書のような視角は必要不可欠なのである。その意味から、本書の意義はとてつもなく大きい。

（二）課題

ただ、本書にもいくつかの課題はある。言うまでもなく、成果の大きさに比べれば取るに足らないことばかりであるが、当評文を構成するために付加しておく。

まず、全体の構成に関してである。本書では、鎌倉時代と戦国時代はそれぞれ全体の三分の一のページが割り当てられ充実

しているのに対し、室町時代は全体の六分の一であり、比較的小さい。史料の残存状況によると言ってしまうとそれまでなのかも知れないが、このバランスはやや気にかかる。というのも、庶民レベルでの参宮者増や、それと相俟った神宮御師家の成立などは、一五世紀後半頃に大きな転換点を迎えている⁶⁾。そのため、地域史としてもこの点を見逃すことはできないと考える。第二章で検討されたような、列島規模での政治的・社会的動向のなかで一五世紀後半の神宮周辺地域を位置づけるような視角がほしい。

これとも関係するが、各章の立ち位置が異なっていることも指摘しておきたい。各章は、神宮の動向を追うことが中心の第一章、日本史のなかに伊勢を位置づける第二章、神宮在所の地域・人的動向を追う第四章、様々な要素が混在する第三章といった色分けができる。それぞれのスタンスは独自性があつて当然よいものの、相互関係は意識が必要ではないか。そうであれば、読み手はひとつの論文集を読んでいるような状態となってしまう。

また、「中世編」としつつも、考古学的な成果がほとんど反映されていないことも気になる。これは別に考古編が組まれているからかも知れないが、やはり通史としての「中世編」とする以上は考古学的な成果を取り入れてほしかったと思う。

最後に、地名比定に関する問題をここで挙げておきたい。本書では、前章でも触れた以外にも、いくつか気になる地名比定がある。第一章第一節では、曾祢莊を「旧一志郡・津市」(実際は「旧一志郡・松阪市」、相鹿瀬を「度会郡度会町」(実際は「多気郡多気町」とするなど、比定地名の間違いが目立つ。また、これらとは少し意味が違うが、第一章二節にある、平信兼が拠った「滝野」を現在の松阪市飯南町内とするのにも疑問が残る。⁽⁸⁾

ここでこのことを取り上げたのは、当然ながら「上げ足取り」が目的ではない。自治体史における地名の重要性を強調したためである。歴史地名は、学問としての地域史を編む上でのみ重要なのではない。歴史に登場する地名が今につながっていることを示すことは、地域に住まう人々が歴史への愛着を持つきっかけともなる、極めて重要な意味を持っているのだ。このことを踏まえれば、自治体史のなかでの歴史地名比定は、学問の領域における意義とはまた違った重みがあると考えなければならない。本書が優れた成果品であるがゆえ、このことをあえて強調しておきたいと思う。

三 自治体史編纂とその指針に関して

最後に、自治体史という書物を持つ性格とその問題について触れておきたい。それは、自治体史とは何を目的とし、いかなる役目を背負っている書物なのか、についてである。

(一) 自治体史の目線

自治体史は、編纂を実施した自治体の予算で賄われる。つまり、税金を投入した書物編纂である。この観点からすれば、自治体史最大の目標は、当該地の歴史を市民・住民に提供することである。

では、この目標を達成するためには何が必要か。それには日本史のみならず、地域史の最新研究成果を加味できなければならない。そのためには、それが可能な執筆者がそれを担うことができるように手配するとともに、それが可能なだけの条件が整備されていなければならない。この結果、最新の研究成果が咀嚼された自治体史が、市民・住民の手に届くことになる。

このように、自治体史には市民・住民目線の観点と、研究成果としての観点の、常にふたつの側面が同居しているといえる。両者は常に有機的な関係を持っているため、自治体史とし

てはいずれか一方が欠けることはできない。しかし、市民・住民目線という側面が抜け落ちても、研究書という側面は独り立ちできる。ここに大きな陥し穴がある。

何度も繰り返し返すが、本書は研究成果という意味では大きな意義がある。しかし、市民・住民目線という観点からはどうだろうか。執筆者の個性にもよるが、いくつか検討の余地が残っているように思う。書物とはそもそも読み手を前提とした媒体（メディア）である。対象（読み手）が誰なのかは、自治体史である以上は研究書以上に意識することが必要と考える。

（二）自治体史の役目

「あとがき」（岡野氏執筆）によると、『伊勢市史』は市制（宇治山田市→伊勢市）施行百周年記念行事の一環として企画され、中世史部会は平成一二年度に発足している。平成一七年度までには史料編の土台となるカードファイルが完成したが、市の財政状況から史料編の刊行が見送られ、通史編一本での刊行という方針になったという。

おそらく、「あとがき」という限られたページのなかでは言い尽くせない、様々な事があったのだと思う。その中で、予定通りの日程で刊行に漕ぎ着けた執筆者各位の努力には並々ならぬものがあつたと拝察し、敬服の感を禁じ得ない。

評者自身が行政に身を置く立場であるからかも知れないが、行政の中で市史編纂事業に対し、重点的に予算配分できない事情も、分らないではない。それでも自治体史は、一度編纂を決定した以上は、それを貫徹するために十分な予算と時間を与える必要がある事業でなければならない。というのも、自治体史は一度刊行されれば長らく活用される「行政の隠れた顔」だからである。多色刷りで大量頒布される一般の行政配布物とは訳が違ふのだ。自治体史編纂は、たとえ何かのイベントを契機に決定されたとしても、このあたりを意識し、継続されなければならない。自治体史の評価は、刊行直後には決まらない。数年先、いや、数十年先にこそ、その真価が問われるのである。

この意味で、本書が「史料編」を持たなかったことは、やはり大きな問題である。「あとがき」の行間からは、史料編の欠如を補うべく執筆者各位が奮闘されたことが読み取れるが、史料編と通史編はそもそも性質が異なるので、通史編で史料編の欠を補うことは、本質的に不可能である。本書の編集・執筆者諸氏は、このことを十分に認識した上で、変更された編集方針に従ったのだろう。この点は、自治体史編纂事業にかかる行政の問題として、今後のためにも充分認識しておく必要があることを強調したい。

おわりに

本書は、伊勢市域を中心とした中世史像に、新たな観点を提示したという点で、大きな意味を持つ一冊である。本書を契機に、新たな研究が広がることと期待できる。

この一方で、本書は自治体史とその編纂事業が担う様々なことを考えさせる一冊である。自治体史とその編纂事業とは何か。おそらくそれは、刊行によって終了するものでもなければ、事業の終了によって完成するものでもないのだろう。確かに一冊の本の完成は、一定の区切りであるが、「研究書」としても、新たな「行政の顔」としても、ここから息の長い歴史を刻むのだ。新『伊勢市史』は、いま生まれたのである。

本書を手にし、「発刊のことば」から「あとがき」まで、全てに目を通して頂きたいと思う。

最後に、本書を世に出された編集・執筆者の努力に対し、改めて心からの敬意を表します。

【註】

(1) この詳細については、拙稿「道と短冊形地割」(『中世の道と橋』高志書院、二〇〇五年)を参照されたい。

『伊勢市史 第二卷 中世編』(伊藤)

(2) 中世古祥道『伊勢愛洲氏の研究』(三重県郷土資料刊行会、一九七五年)。

(3) 稲本紀昭「伊勢国国人愛洲氏について」(『ふびと』四三、三重大学歴史教室・同研究会、一九八六年)、小林秀「古代・中世の勢和」(『勢和村史』通史編、一九九九年)など。

(4) 木村政生『神宮御杣山の変遷に関する研究』(国書刊行会、二〇〇一年)。

(5) これについては、拙稿「熊野街道八鬼山道周辺の中世石造物」(『三重県史研究』二四、二〇〇九年)を参照されたい。

(6) 西山克『道者と地下人』(吉川弘文館、一九八七年)など。

(7) 稲本紀昭「曾祢荘と平信兼」(『日本史研究』二三四、一九八一年)、三雲町編『三雲町史』第一巻通史編、第二巻史料編1(二〇〇三、一九九九年)。

(8) 前掲註(7) 稲本氏論文により、平信兼の拠点は伊勢国一志郡界隈に求められることが判明している。とすれば、平信兼が最後に拠点とするのも、飯高郡の山中とすることも再検討される必要がある。私見であるが、平信兼の拠った「瀧野」とは、雲出川支流の中村川中流にある滝之川を指すのではないかと考えている。

(いとう ひろひと・三重県埋蔵文化財センター)